

# ビジュアル・オーガナイザーをもちいた小論文の作文教材の開発と評価

## ～小学校4年生国語科の作文指導を事例として～

村野 聡（国立市立国立第六小学校／明星大学大学院）・今野貴之（明星大学）

概要：本研究の目的はビジュアル・オーガナイザーをもちいた小論文の作文教材の開発と評価である。論理的な文章構成にもとづき文章を書き始める小学4年生（東京都公立小学校）を対象とした。3つのビジュアル・オーガナイザーを組み合わせた作文教材を開発し、国語の授業において小論文指導を行った。教材の使用前後のデータを比較検討した結果、教材の使用により、一定数の児童が小論文の作文技術を身に付けたこと、作文の分量が増えたことが確認できた。今後の課題は、本教材を使用して繰り返し小論文を書くことの影響を探ることである。

キーワード：ビジュアル・オーガナイザー，小論文，作文教材

### 1 はじめに

本研究の目的は、小学4年生（東京都公立小学校）を対象としたビジュアル・オーガナイザーをもちいた小論文の作文教材の開発と評価である。

日本の小学校では生活綴り方運動に代表される、日常の経験を対象に文学的かつ情緒的で細部の表現や描写にこだわる作文指導が長く行われてきた。それは一般社会で必要とされる作文技術とは遊離した作文指導であった。

1990年代に入ると日本の現場で指導されてこなかった小論文が大学入試に採用されるようになった。学習指導要領もこれを追いかける形で次第に実用文や説明文などの論理的文章を作文指導の内容に入れるようになった。

これとは対照的に、アメリカの作文指導は小論文（エッセイ）の指導が中心である（渡辺 2004）。小論文は明確な三部構造を持ち、最初に何を言うのか明らかにし（序論）、次にその主張を三つの事実で証明あるいは擁護し（本論）、最後に最初と違う言い方で主張を繰り返す（結論）。作文の授業ではこのような文章の「型」を身に付けるため、手本をなぞって書くことから始める。

日本においても「型」を教え、身に付けさせる指導に関する研究知見はあるものの（清道 2010）、初等教育における小論文の「型」を対象を絞った報告は少ない。さらに、三部構造の序論・本論・結論の記述内容に関する報告も同様である。

そこで、本研究では児童がビジュアル・オーガナイザーに言葉を当てはめながら小論文の三部構造を

組み立て、詳細な記述ができる教材を開発する。ビジュアル・オーガナイザーには、課題を違う視点から見ることで思考を整理し、新たな発見を促す効果が報告されている（梶村 2008）。この作文教材を「作文の設計図」とすることで、小論文を書く技術を身につけることができると考えた。

### 2 研究方法

#### （1）研究の対象

論理的な文章構成にもとづき文章を書き始める小学4年生（東京都公立小学校）30人（有効数27人）

#### （2）研究期間

2018年6月から2018年8月

#### （3）教材の開発

3つのビジュアル・オーガナイザーを組み合わせ、1枚のワークシートに構成した（図1）。これによりスモールステップで小論文の型を身に付けられる作文教材となった。

3つのビジュアル・オーガナイザーの1つ目は「ウェブ」と呼ばれる題材・テーマ発見ツールで、一般的にマインドマップと呼ばれる。テーマを中心概念とし、そこから連想することを書き出して発想させることをねらいとしている。

2つ目は「フォースクエア・ライティング」と呼ばれるパラグラフ構成ツールである。フォースクエア・ライティングは Gould et al.(2010)が考案したもので、ひとつのテーマに対して4つの四角枠の中に根拠を書き込ませるものである。

3つ目は「エッセイ・トライアングル」と呼ばれる文章の全体構成を構想するためのツールである。ト

ライアングルを横に区切り，上から下に向かってエッセイの内容ごとに何を書くのかメモしていくツールである。これは日本語の縦書きに対応する形に変えて使用する。

#### (4) 調査及び分析方法

作文の題材のみ提示し教材を使わない状態で書かせた作文（事前テスト）と教材を使用して介入指導しながら書かせた作文（事後テスト）とのデータ比較を大井（2017）を参考に行う。児童の作文データは逐次文字化し，小論文の三段構造で書いているか総段落数で分析する。加えて，序論・本論・結論それぞれ詳細な記述ができたかを総語数の平均値の増減と標準偏差の比較をする。総語数の平均値の増減で全体的な成果は見えるが，作文を書くことを比較的得意にしている児童，苦手としている児童，その中間に位置する児童ではどの層に教材の効果が見られたかを捉えるために標準偏差をもちいる。

### 3 結果及び考察

分析の結果，ビジュアル・オーガナイザーを使った作文教材を使用したことで小論文の型で書けるようになったこと，また，作文を詳細に記述できるようになったことが分かった。

#### (1) 小論文の三段構造の達成状況

教材を使用した小論文は「はじめ」「3つの具体例」「まとめ」と5段落となる。5段落で記述できた児童は27人中23人であった。2つの具体例しか書けなかった1人の児童も4段落で構成していたため教材の効果があつたと解釈して有効数に加えると27人中24人が小論文の型で書くことができていた。4段落で段落数が足りない児童が2人，6段落で段落数が多かった児童が1人いた。

#### (2) 序論・本論・結論の書かせ方の状況

事前テストで27人の総語数の平均値が437語（小数第一位以下切り捨て，以下同様），事後テストでの総語数の平均値は651語であった。総語数は平均で214語上昇していた。個別で見ると総語数が上昇した児童が27人中24人と上昇した。一方，3人の総語数が下降したことも分かった。

それぞれの標準偏差を見ると，事前テストが143，事後テストが185となった。事後テストの標準偏差が上昇しており，総語数の最も多い児童と最も少ない児童の範囲が広がったことが分かる。どの層での伸びが高いのかを調べるために事前テストで総語数の多い順に児童を3層に分類し，その平均総語数の

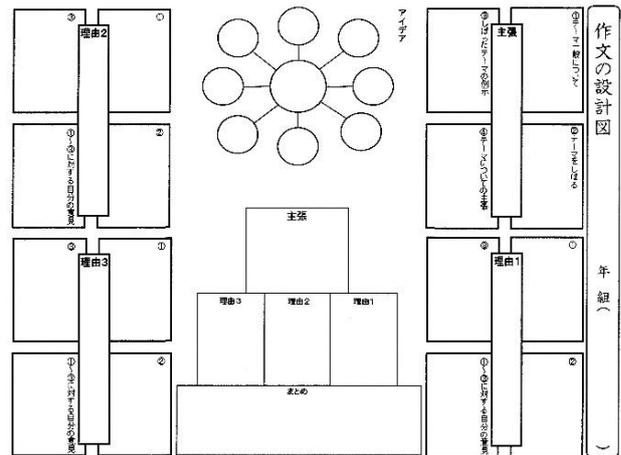


図1 開発した作文教材

増減を求めると，下位総語数層が139語の上昇，中位総語数層が128語の上昇，上位総語数層が16語の上昇であった。

ビジュアル・オーガナイザーは一つ一つのフレームに児童が書こうとした内容を細分化して書き込ませるようになっているため，一つの内容を違う視点から見せる効果がある。このことにより，思考を整理し，新たな発見により詳細な記述ができたと考えられることができる。児童27人中，26人がすべてのフレーム内に書き込むことができていた。特に中位，下位層での効果が高かった。

### 4 今後の課題

今後の課題は，作文教材を繰り返し使用していくことで教材を使わずとも小論文を書くことができるようになる過程を明らかにすることである。

### 参考文献

- Gould, J. S., Gould, E. J. and Burke, M. F. (2010) Four square writing method for grades, Dayton, Educational Press. USA :7-9.
- 大井恭子 (2017) 認知心理学の成果を援用したライティング指導 - 「キュー・カード」を使用した中学生への指導の効果検証-. 言語教育研究 9, 清泉女子大学言語教育研究所, pp.87-109.
- 清道亜都子(2010)高校生の意見文作成指導における型の効果, 教育心理学研究 58 (3) :361-371.
- 相村知美 (2008) マインドマップを用いた作文指導 : 蘇州日本人学校中学3年生クラスでの実践事例, 山口国文 31, pp.100-84.
- 渡邊雅子 (2004) 日・米・仏の国語教育を 読み解く - 「読み書き」の歴史社会学的考察-, 日本研究 第 35, 国際日本文化研究センター :573-619.